

短期大学の多文化教育カリキュラムをめぐる一考察

——日本語学校就学生に対する聞き取り調査を中心として——

久村 研

Towards Better Curricula for Multicultural Education at a Junior College: Results from a Qualitative Survey of the Academic Preferences of Foreign Students

Ken HISAMURA

I. 背景

本研究は、日本私立学校振興・共済事業団の経常経費特別補助「高等教育研究改革推進経費」による共同研究で、昨年度に引き続き、2年目となる。昨年度は11校の日本語学校にアンケート調査を依頼し、計931人の就学生から回答を得て、「多文化教育環境におけるカリキュラムの研究」(久村2002)という論題でその調査結果をまとめた。しかし、アンケートという調査形態は量的調査である。調査結果の妥当性と信頼性を高めるには、質的調査が必要となる。従って本年度は、聞き取り(インタビュー)調査の形態で、昨年度の調査結果の深層部分を探った。

II. 目的

昨年度の調査結果を、インタビューという質的調査によって検証し、それに考察を加えることによって、より進化した多文化教育およびそのカリキュラム作成へのコンセプトを提示することが本稿の目的である。

III. 方法

1. 調査対象者：日本語学校の就学生。
2. 調査方法：日本語学校に協力を委託し、筆者および渡邊亜子講師が協同して就学生のグループに対しインタビューを行う。
3. 期間：2002年9月～12月。
4. 使用具：昨年度アンケート調査用紙，MDレコーダー。

5. 筆録：外部に業務委託。

IV. 結果

1. 聞き取り調査実施校，実施時期，人数，面接者

以下の通りである。ただし，実施時期の年号はすべて2002年である。

| 実施校 | 実施時期 | グループ人数 | 面接者 |
|--------------------|------------------------------|--------|--------|
| 飛鳥学院 | 9月13日 (10:00 am~12:30 pm) | 13人 | 久村, 渡邊 |
| | | 13人 | |
| 翰林日本語学院 | 10月8日 (10:00 am~12:30 pm) | 10人 | 久村, 渡邊 |
| | | 10人 | |
| 西東京国際教育学院 | 12月10日 (9:30 am~11:00 am) | 8人 | 渡邊 |
| | | 9人 | 久村 |
| ダイナミック ビジネスカレッジ | 12月17日 (1:00 pm~3:00 pm) | 7人 | 久村, 渡邊 |

2. 短大進学を考える理由

前年度の量的調査によって，就学生の短大希望者は，第3志望までを含み19%程度であることが判明した。つまり，およそ10人に2人弱が何らかの理由で短大進学を考えていることになる。今回のインタビュー調査では，その理由を明らかにしたいと考えた。そこで，各インタビュー・グループの中で，「短大進学」を第3志望まで含めた者に対し，次のような質問をしてその理由を尋ねた。

「あなたはなぜ短大を希望しますか」

「短大卒業後はどうするつもりですか」

「あなたにとって短大への入学はどんな意味がありますか」

「短大にどのようなことを期待しているのですか」，など。

この質問に対する回答を分類すると，「積極的な理由（「やや積極的な理由」を含む）」「消極的な理由」「否定的な理由」の3つにカテゴリー化された。

(1) 積極的な理由

筆者の予想の範囲内であったが，短大進学を積極的に考えている理由は，次の2通りの回答であった。

- (男) 短大卒業でもらえる準学士を利用して，4年制大学の3年に編入をしようと考えている。
- (女) 短大の時間は短いので，その後，他の国に留学したい。英語が世界で使える言語だから，英語圏に行きたい。

一方、やや積極的と考えられるのは、次の2つのパターンである。

- (男) 短大が第1希望。4年制大学に入る前に短大に入って、大学で勉強することを短大でしっかり勉強しておきたい。で、その後大学に行きたい。大学は3年編入ではなく、1年から入りたい。
- (女) 私は他の学生より、少し年齢が上なので、4年制だと少し長い。だから短大に行きたい。短大を2年で卒業したい。

前者は短大を第1希望としていながら、実は「4年制大学1年入学への受験準備」期間として設定している。恐らく、日本語能力にまだ自信が持てないからであろう。後者は、年齢が高いという理由だが、短大で学ぶ目的が曖昧で、中には、日本滞在を延長するための方便とする学生もいるかもしれない。この2つのパターンは、現在本学で学ぶ相当数の留学生にも当てはまり、さまざまな教育指導上の課題を投げかけている。

(2) 消極的な理由

一方、消極的な理由の代表は、

- (男) 日本に来たのは4年制大学にはいるためだが、万一ダメだったら短大に進学する。である。この理由と基本的に同じだが、さらに具体的に述べた回答として次の3つをあげておこう。
- (女) 短大は第3希望。もし4年制大学に合格しなかったら、短大に行く。第1希望は4年制大学。第2希望は専門学校。
- (男) 短大は第3希望。大学に合格するのは難しいと考えている。専門学校の学費は高い。短大で学費が安いところがあれば短大に行きたいと思う。
- (女) 4年制大学がダメだったら、短大に行きたい。専門的な勉強も出来るし、技術の勉強も出来る。

要するに、「4年制がダメなら、専門学校か短大に行く」というのがこのカテゴリーの学生で、数としては一番多い。もしこのカテゴリーの学生が入学した場合、「4年制大学1年入学への受験準備」に入る可能性が高い。ただし、この中で、特に最後の回答には、短大教育への「期待」が込められていることに注目しておきたい。短大の存在意義を、ある意味で言い当てているからである。

(3) 否定的な理由

短大進学に対して否定的な意見を求めなかったため、この項目に関する回答者は少ないが、

- (女) 短大は専門学校と同じだと思う。私はもっと英語を勉強したい。4年制がダメなら専門学校で英語を勉強しようと思う。
- (女) 短大は(出身)国で認められていない。短大で時間を使うのはもったいない。短大では、本当の大学生活が体験できないと思う。

というのが典型的な反応であった。この意見を含め、多くの回答者にとって、短大は認識の埒外にあるようだ。

3. 大学選定基準

「教育の質」「社会的名声」「カリキュラムの内容」「学費が安いこと」の4項目が、前回の調査では他を圧倒して高い基準となった。この中の「教育の質」と「カリキュラムの内容」に関して、調査結果報告の中で、さらに調査する必要性を言及した。従って、今回の調査の中心はこの2点であるが、なるべく多くの考え方や相互の関連性を聞き取るために、他の2項目も質問に加えてみた。質問事項は次のようなものである。

「教育の質とは、あなたにとって具体的に何を意味していますか」

「カリキュラムの内容とは、あなたにとって具体的に何を意味していますか」

「学費が高くても、教育の質やカリキュラムの内容がよければ選択しますか」

(1) 教育の質

1) 教育の質＝教員の質

大多数の回答者が一致したのは、「教育の質とは教員の質である」ということであった。中でも、教員の専門知識や教え方（教授力・授業力）に言及する意見が多い。例えば、

- （男）先生がどれくらい知識を持っているか。授業の教え方。つまらない授業では勉強できない。
- （女）先生の引力が1番大切。学生が活発に勉強できるかは先生による。
- （男）学生一人一人に対して適した教え方をすること。個人にあった教え方をすること。
- （女）先生が聞き取りやすく、分かりやすく、学生の心に残る授業をしてくれること。
- （男）大学で専門は大切ではない。勉強方法が大切だ。先生の教え方が大切だ。教え方が重要であり、専門がいくら素晴しくても関係ない。専門知識は忘れてしまうかもしれないが、勉強方法を覚えていれば大丈夫だ。
- （女）先生の質。学校で先生と学生が仲良くなれるか。先生の知識が豊富であること。学生が先生を敬う気持ちを持ち、先生を目標にして頑張る雰囲気。

などが代表的な意見である。また、専門知識や教授力・授業力以外にも、次のような指摘をした学生もいた。

- （男）勉強だけではなくて、人間関係も重要。就職の仕方まで教えてくれる先生が必要。就職の問題も絡んでいる。

「教員の質」に限定されたものではないが、この指摘に関連した意見もあった。

- （男）質のいい教育をしている学校は、会社にも人気がある。いいところに就職している人の多い大学が、教育の質が高い。

ところで、就学生は受験する大学の教員の質を、どのように見定めようとしているのだろうか

か。この点に関しては意見が分かれたが、次の4つのカテゴリーに分類することができる。

〈情報収集型〉

- (女) 大学を知っている日本人や、その学校で勉強した中国人などに聞いてみる。そこに通っている留学生に聞いて判断する。
- (男) オープンキャンパスを見に行き先生と話す。色々な質問を試みる。自分でいい先生は判断する。先輩に話を聞いて情報を集める。
- (男) 学校に行き、卒業生の進路やいい大学への編入数などを調べて、それが良かったら先生の質もいいと考える。卒業生の結果から先生の質を判断する。
- (男) 先生の発表した論文。世界的・全国的名声。論文の質。国会図書館で調べる。

〈社会的名声型〉

- (男) 有名な大学は先生もいい。
- (男) 学校の有名さにつながる。有名な学校は、教員の質があまり悪くない。社会的名声とつながっている。

上記がこの型の代表だが、これに異を唱える学生もいた。

- (男) テレビ等に出ている有名な先生がいる学校でも、あまり評判のよくない学校がある。入試の倍率も低い。日本人もあまり入りたがらない。先生が有名でも、いい学校だとは限らない。

〈有名学部・学科型〉

- (女) 一人の先生じゃなくて、学科が有名かどうか。進路相談で有名な大学の学部・学科などについて聞く。
- (男) 大学毎に有名な学部などが違う。自分の勉強したい専門で学校を選ぶ。それぞれの大学で特徴のある学部の教員は質が高いと考える。

〈否定型〉

- (女) 教育の質・教師の質がいいことは希望であって、入学前には分からない。進学する学校を決定する要素にはなかなかならない。

以上の意見を聞くと、大学における Faculty Development (FD) がいかに重要であるかを再認識させられる。専門の研究はもとより、組織的に学生を教育する体制を作れない大学は、おのずから淘汰されていくであろう。

2) その他

〈入試の難易度〉

- (女) 学校のレベル。レベルは入学の難しさを判断する。
- (女) 社会的名声と関わる。日本人が難しい学校と、留学生が難しい学校は同じだと考えている。

〈教育体制・カリキュラム〉

- (女) 休校が多い学校や、代返ができる学校や、学校へ行かなくてもレポートで単位がとれ

る学校などもあるが、そんな学校ではなくて、学費を払っているのだからそれなりの授業をして欲しい。ちゃんとした学校で勉強したい。教育の質はキチッと教育をしてくれること。

- (女) 授業のカリキュラム、どういう段階で勉強していくかが大切だと考えている。教育の質とカリキュラムは同じ。

〈学生の質・環境設備〉

- (男) 先生だけではなく、学校の環境、設備、学生の質も教育の質だと思う。クラスメートに悪い人がいたり、設備が悪ったら教育の質はいいとは言えない。環境が悪かったら、いくら先生が良くても勉強する気がなくなる。環境はとても大切。環境には設備も入る。

(2) カリキュラムの内容

インタビューによって、本項目には欠陥があったことに気付かされた。つまり、「カリキュラム」ということばの意味が分からない学生が2～3割いたのである。さらに、この項目を選んだ学生でも、その具体的な理由をヒントなしで述べさせると、次のような答えが返ってくるだけであった。

- (男) カリキュラムの内容が自分の目標にあっているかどうか。目標にあっているものが大切。
- (女) 学校によって重視する科目内容が違う。自分が勉強したいものがしっかり勉強できる学校で勉強したい。

これではわざわざインタビューをする意味がない。従って、「専門科目が、理論的(学問的)なものであるか実学的なものであるか」(〈理論的科目か実学的科目か〉)、「他の学科の科目も履修できるようなシステムになっているかどうか」(〈他学科の科目履修〉)、「専門科目以外にも面白そうな科目が並んでいるか」(〈専門科目以外〉)などのヒントを上げて回答を引き出すことにした。

〈理論的科目か実学的科目か〉

- (女) 実学よりも研究のためのカリキュラムが並んでいる方がいい。

という意見と、

- (女) 実学的な方を選ぶ。

という意見が相半ばしたが、後者に属するもので説得力があったのは、

- (女) 中国で6年間就職した。仕事に関する科目を考えている。実学的な、すぐ仕事に役立つ科目がいい。

という回答で、この傾向は学歴が高く、職業経験のある学生に顕著であった。しかし、全体的な傾向を読みとると、

- (男) 専門学校は1つの技術を勉強することで将来の就職に役に立つが、大学では、理論と実践の両方とも勉強した方がいい。
- (女) 自分が勉強したい科目があるかどうか。理論的なものも実践的なものも勉強したい。というところに落ち着くようである。しかし、迷える子羊もいる。

- (女) 自分が本当に勉強したい内容が学べるかどうか。将来の仕事に役立つ科目があるかどうか。勉強したい学科のことだけを考えているので、理論的な科目がいいか、実学的な科目がいいかは考えていない。

〈他学科の科目履修〉

- (女) 別の専攻の科目が取れる方がいい。

という反応だけで集約できる。

〈専門科目以外〉

前項と同様、このヒントも「誘導尋問」の域を出なかった。

- (男) 専門のもの1つだけでいい。

という意見はごく少数で、大勢は、

- 専門以外でも色々な科目がとれるカリキュラムがいい。

であった。

最後に、カリキュラムを総合的に考え、大学のことをよく調べていると思われる回答を紹介しておこう。

- (女) 自分が選んだ学科、自分が勉強したいことがちゃんとカリキュラムに入っているかどうか。学校によってカリキュラムは色々違う。例えば、英語はどの学校にもあるが、交換留学が出来るかどうかなどに違いがある。他の学校に比べて勉強しやすいかどうかも重要。机に向かってする勉強だけではなくて、外国人の友達との付き合いやすさや、先生と学生の関係も重要で、これらもカリキュラムと関連するのではないかと思う。

4. 希望専攻分野

人気のある学部学科の第1グループは「経営・商学」「経済」「語学」で、第2グループは「情報」が単独で形成しているというのが昨年の結果である。この結果を踏まえ、今回の調査では、

「経営・商学ということばを聞いて、どんなイメージを持ちますか」

「経営・商学を学んで、将来どんな仕事をしたいのですか」

「情報といっても、ハードの分野ですか。ソフトの分野ですか。また、どの程度できるようになることが目標ですか。」

「語学はどんな言語を指していますか。また、どの程度できるようになることが目標ですか」という質問に絞って、学生たちがこれらの分野を選択した理由を探ることとした。ただし、最後の「語学」についてはほぼ英語に限定された意見なので、「英語学習」の項に回すこととする。

(1) 経営・商学

「経営」ということばの連想から、

- (男) 経営は、会社を運営するイメージ。
- (女) 実学的なもの。よく使うもの。将来に役立つもの。
- (男) 経営は現在、社会的に1番必要とされる分野だ。

という反応が出てくるのは必然である。また、中国出身者には、

- (女) 日本で色々な経験をして、国に帰ってから自分の商売をしたい。商売をする時に、商売の方法が分かるように、経営や商学の勉強をしておきたい。
- (男) 自分の会社を持ちたい。会社をやるには経営が1番大切だから、経営を専門に選んだ。

と考えている学生が比較的多いようだ。しかし、これらの反応は、イメージが先行して、具体的な学問分野やその適性職業に対する情報を、まだ十分に得ていない段階と言えるだろう。

一方、具体的な希望職種や分野を上げて回答する学生もかなりいる。代表的な分野は次の通りである。

〈旅行・観光ビジネス〉

- (女) 旅行関係の仕事をしたと思っているので経営を勉強したい。観光ビジネスの仕事をしたい。
- (男) 中国で、「ホテル管理」を専門に勉強した。その関係もあって、日本で経営を勉強したいと考えている。

〈ビジネス・マネジメント〉

- (男) 将来、父親の会社を継ぎたい。そのためビジネス・マネジメントを勉強したい。

〈市場調査〉

- (女) 流通やマーケティングを勉強したい。市場調査の仕事をしたい。

〈国際貿易〉

- (女) 国際貿易に関して勉強したい。

この他、出身国での職業経験から具体的に回答する学生もいる。

- (女) 中国で大学の専攻は不動産経営だった。日本でも、続けて不動産経営の勉強をしたい。
- (女) 日本に来る前に、何年か外資企業に勤めていた。リーダーや管理者になるために、少しでも経営の勉強をしておけば、役に立つのではないかと。国に帰って就職する場合でも、日本で就職する場合でも、ビジネス関係の仕事につけるのではないかと。思う。

「カリキュラムの内容」の項でも明らかになったが、ここでもやはり実学志向が強いことが分かる。理論的な科目より、職業に直結する、目的のはっきりした具体的な科目を望んでいる。

(2) 情報

前年度の調査では、第2志望のトップに来たのが情報であった。特に短大志望者では、全体の構成比で「経営・商学」に迫る第2位の高さであったが、総合的に判断して、「純粋に情報の分野に進もうというより、情報の重要性を認識している」(p.122) 表れであると解釈した。この解釈は、今回の調査である程度正しいことが判明した。そのことを証明する典型的な回答は、次のようなものである。

- (女) 今の会社はコンピュータが必要だから、会社で使えるだけのコンピュータの知識が欲

しい。専門的に勉強したい程ではない。

- (男) コンピュータについての知識を得たい。ソフトの面で。将来、広告会社で働きたいので、コンピュータで広告のデザイン等がしたい。
- (女) ハードもソフトも両方、勉強する必要があると思う。子どもの頃から観光ガイドになりたかったのだが、観光ガイドには情報はとても重要だと思う。情報とは自分の知識の幅を広げることであり、そのために勉強しなければならない。情報ソフトを処理する勉強が必要だと思う。

このように、(専門的な) 職業につくにはコンピュータの知識や技能が不可欠である、という認識があるからこそ、人気の分野になると判断できるだろう。また、専門的な分野だけでなく、日常的にもコンピュータの有用性は十分に認識されている。

- (女) ソフトの分野を勉強したい。深くなくても、普通にコンピュータを使えばいいと思っている。日常的に使えばいい。集中して勉強したいという程ではない。

以上の回答から、様々な科目でコンピュータを利用したシラバスを、可能な限り作成することが肝要となる。

5. 希望する授業内容について

前回の調査では、「インターネットを用いて海外と英語でメッセージ交換が出来る授業」「コンピュータで自己表現する授業」「日本社会の仕組みや人間関係がわかる授業」「日本や世界の株式市場の動向を紹介・分析する授業」「日本の社会や文化の体験的な授業」に人気が集まった。この中で、第1項と第2項は密接な関連があると考え、第2項のみを質問することとし、他の3項と併せ、それぞれの具体的なイメージを明らかにしようと試みた。

(1) コンピュータを用いた自己表現の授業

「コンピュータを用いた自己表現とは、どのようなことを具体的に考えていますか」という質問に対し、予想通りホームページをあげた学生が大半であった。

- (女) ホームページを作って、自己表現をしたい。自分の考えをコンピュータ上で発表したい。
- (男) 自分で言いにくいことを、コンピュータを使って相手に伝えたい。ホームページを作っている人と意見を交換したい。自分もホームページを作りたいと思っている。

ホームページや電子掲示板(BBS)での情報や意見交換を「自己表現」と捉え、さらにインターネットを利用したコラボレーション(協同)授業を望む学生も多い。

- (男) インターネットを利用して、自分が勉強したいことや分からないことを他の人と交換して一緒に学ぶ授業をしたい。授業の中で、インターネットを使って遠くの人と意見交換をして、一緒に勉強したい。知識を交換したい。教えてもらったり、教えてあげたり。

一方、コンピュータ・デザインの勉強をしたいという学生も少なからずいた。

- (男) スーツやチャイナドレスのデザインをコンピュータでして自己表現したい。

英語教育の中で重視されている「自己表現」活動が、「自分自身のことについて語る（あるいは書く）こと」と理解している人が多い（金谷2002）のとは異なり、就学生たちは、コンピュータによる「自己表現」活動の意味をしっかりと把握していると考えておく必要がある。コンピュータを利用した授業のコンテンツをしっかりと構築する必要があるだろう。

(2) 日本社会の仕組みや人間関係がわかる授業

この項目で明らかにしたいと考えた点は、この授業を主に実利的な観点（就職）から捕らえているのか、あるいは、主に文化的な観点（異文化理解）から捕らえているのか、ということである。そこで、「日本社会の仕組みや、人間関係を知りたいということは、将来日本の企業に勤めたいという希望があるからですか。それとも、何らかの形で帰国後も日本とのかかわりをもちたいと考えているからですか」と問うてみた。しかし、日本に来てまだ日の浅い就学生から、具体的な回答を期待することには無理があった。多くの学生は、日本社会や日本人との付き合い方に戸惑い、日本でうまく生活するヒントをこの授業に求めている。

- （女）日本の企業に勤めたいとまでは考えていない。大学で日本人の学生、日本人と付き合いわなくてはならないので、日本人についてもっと勉強したい。もっと知って付き合いたい。国によって文化も異なるので、色々なことが分かれば人間関係も上手くいくんじゃないかと思う。だからこんな科目もあつたらいいのではないか。
- （女）日本社会の仕組みや、人間関係が分からないと困ると思う。今は日本語学校だから、あまり日本人と接することがないが、大学に行ったら日本人と多く接すると思うので、知らないで困る。大学で教えてくれたらいいと思う。
- （男）今まで1年間、日本人との人間関係で本当につらい思いをした。まだ日本人の人間性が分からない。もっと知りたいので勉強しようと思う。知らなくてもいいと思うが、表に現れている面と、奥に隠れている面が全然違うものなので、それが知りたい。（仕事というよりも）人間関係の処世術に役に立つと思う。

「就職に役立つ」と答えた学生も少なからずいる。しかし、彼らとて、具体的な方向を見出しているわけではない。

- （女）日本に来ているから、日本社会の仕組みが分からないと就職できないと考えるから。大学の勉強だけでなく、色々勉強しておいた方がいいと思う。どこの国で就職するにも、人間関係は必要だ。
- （男）日本の仕事での人間関係は複雑だから、これを勉強したら役立つ。将来、日本人と仕事をしたい。

(3) 日本や世界の株式市場の動向を紹介・分析する授業

「株式市場の動向を知ることは、あなたにとってどのような意味がありますか」に対する回答は、すべて積極的なものばかりであった。中には、

- （男）この科目がなければ大学に行かない。

とまで言い切る学生がいる。概ね、

- (女) 自分の国だけでなく、国際化が問題となっている。色々な国の情報を集めて考える必要があると思う。株式市場を見ることから、国際社会を知ることが出来る。

という反応に集約されるから、世界は経済、それも市場原理で動いていることを、多くの就学生が認識していることがわかる。経済や経営の分野に進まない学生も、

- (女) 現代社会で株式市場は重要だと思う。自分の専門分野(医学)とは異なるが、このような授業も受けてみたい。

という希望を持っている。

(4) 日本の社会や文化の体験的な授業

残念ながら、この質問は前項(2)の回答とほぼ重なる。「体験的な」という部分に焦点をあて、「体験的な日本文化の授業とは、具体的にどのような授業を考えましたか。あるいは、どのようなところに行ってみたいと思いましたか」という質問を試みたが、こちらの意図が十分に伝わったとは思えなかった。そこで、博物館、美術館、資料館、企業訪問、京都や鎌倉などの歴史・文化都市の訪問、各種ボランティアへの参加、などを例にあげたが、

- (男) 体験的な日本文化の勉強として、日本人の家でホームステイしてみたい。日本人の友達が欲しい。
- (女) 本だけで勉強するより、自分が参加して勉強の方が実感できる。日本にいるから、体験したことが将来の役に立つと思う。実際に日本語学校の課外授業や社会見学に参加して体験するように心がけている。
- (女) 実際の生活で、フィールドワークの中で暮らしていると思うが、一人で体験するより、みんなで体験しに行き現地の人と会い、話し合う方が勉強になると思う。日本の文化に興味を持っているので勉強したい。興味からの勉強だが、将来にも役に立つと思う。

など、かなり観念的な回答が出て来たにとどまった。フィールドワークの重要性を認識しているが、短時間では具体的なイメージまでは浮かんでこなかったと考えられる。授業担当者の創意工夫が要求されることになるだろう。

6. 英語学習について

前回の調査ではほぼ80%の回答者が、大学に入ってから英語を学習すると答えており、その目的は圧倒的に「日常英会話の習熟」であった。この項に関しては、この前回の調査結果を前もって回答者に明らかにし、なぜ「日常会話の習熟」が最も支持されるのかをたずねてみた。当然のことながら、

- (女) 英語は全世界で通用している言葉なので。国際語なので。
- (女) 英語は世界で1番使われている言葉だから。基本の言葉だから。会話やインタビューに英語は使われる。英会話が出来ればどの国でも話が出来る。

ということが基本的に認識されており、さらに、

- (女) 英語を勉強している人が多い。私も小学校3年生から、英語の勉強をしている。で

も、実際に外国の人と話せないことがたくさんある。中途半端だ。たくさん勉強したのに話せない。書く能力より、会話能力が大切だと思う。

と、コミュニケーション能力を重視する意見が大勢を占めた。そして、英会話能力を獲得する目的は、次の2つの意見に集約される。

- (男) 英語は共通語だから。就職に英語は必要だと思う。
- (女) 会社に入った時、英語ができればやれる仕事が多くなる。海外出張なども出来る。一方、「学習」という観点から、分析的に述べた意見もあった。
- (女) 英語を今まで勉強したことがない。でも英語は欠かせないもの。新聞が読めるようになるといいが、そこまで出来るようにならないとしても、簡単な英語、旅行用の英語などが出来るようになればいいと思う。日常会話の習得までは要求しない。1番簡単な英語。道を聞く程度。英語を勉強したことがある人は、英語の難しさを知っているから、日常英会話が出来ようになることを望む。英語を勉強したことがない人は日常会話ぐらい出来るだろうと考えて、日常会話以外のものを選ぶこともあるかもしれない。
- (女) 日本語など外国語を勉強していると、外国語の難しさを知っているから、そんなにすぐ、出来るようになるとは思えない。少しずつ勉強していかなければならないと思う。

前回の回答者の72.8%が英語を学習した経験を持っている。とすると、上記2名の分析はかなりのをえた指摘だろう。しかし、英語ができる、できないは別として、次の意見に代表される考え方をもち学生が多いことも事実である。

- (男) 普通の会話が出来ようになりたい。買い物が出来る程度ではなく、もう少し深く専門的なことについて話せるようになりたい。日常会話より少し難しいことが話せるくらいまで出来るようになりたい。
- (男) ビジネス英語は日常会話と少し違う。ビジネスをする時は、相手の心を読む。外国人の場合は考え方が少し違う。その違いを理解して話すとビジネスが上手くなる。そのような話す英語の勉強をしたい。

以上のほかにも、英語学習の目的について様々な意見が出たが、個々の事例となるので省略する。

V. 考察

1. 短大進学希望者の類型

日本語学校就学生の進路は、「第1志望は4年制大学(4大)、次は専門学校、それでもダメなら帰国して就職」というのが大方の傾向である。この傾向の中で、「4大がダメなら」という条件節のつく場合が多いが、短大に進学することを考えている学生の類型が、今回の調査で、次の5つのタイプにまとめられる。

- ①短大から4大の3年次に編入する。
- ②短大卒業後海外に留学する。

③年齢が高いから早く卒業できる短大に進む。

④短大で4大への1年入学の準備をする。

⑤専門学校より条件がよければ短大に行く。

上記の中で、短大側が安心して受け入れることのできるのは、①と②のタイプと考えられる。入学時にこのタイプの学生を引き受けたら、途中で進路を変更することのないように、カリキュラムや教育指導の体制を整えて、彼らの希望を実現させてやる必要がある。日本語の授業を除き、同じタイプに属する日本人学生と切磋琢磨させる環境を作ることも要求されよう。

③のタイプは、卒業後日本で就職したいのか、帰国して就職したいのかを見極めた指導が求められる。中には、日本人学生のお手本になるような、目標を持った留学生が入学してくる可能性もあるので、社会教養と技能双方のリテラシーを養成できるカリキュラムを用意することが肝心であろう。

一方、④と⑤のタイプに対処するのは困難を感じる。特に④のタイプに対するカリキュラムは用意できないだろう。⑤のタイプの条件とは、「学費が安い」がほとんどだが、他に、「交通の便がよい」、「アルバイトがしやすい」があがった。確かにこの3点は短大選びには重要な要素となろうが、教育内容より実利的な考え方が先行しているため、好ましいタイプとはいえないだろう。

2. 「教育の質」と「カリキュラムの内容」

(1) 「教育の質」

教育の質を判断する要素に、教員の質、学生の質、社会的名声、設備環境、卒業生の進路、カリキュラム、などがあがった。その中でも、教員の質を第1の要素にあげた学生が大半であった。彼らが求める教師像は、次の4つの類型に分類される。

①学問知識が豊富で、分かりやすく教えてくれる。

②勉強の方法をしっかりと教えてくれる。

③学識と人間的な魅力があり、尊敬できる。

④勉強ばかりでなく就職の仕方まで教えてくれる。

教員の顔や授業のやり方は、外にいる者にはなかなか見えないものである。いくら情報を集めても、それは情報であって実態ではない。教員の質を外に見えるようにするには、公開授業や体験授業、ビデオ、インターネット、視聴覚機器などを用いる方法が考えられる。これらの方法を使って、積極的に外部に教員の顔や授業の実態を出していくことが必要かもしれない。そのためにも、教員には、FDや自己評価などによって、常に自分の専門や授業を見直し、自己改革を続けていくことが要求される。さらに、④の重要性を十分認識し、自分の教えている科目が、将来どのような分野・職種に役立つのか、どのようにすれば希望の職種につけるのか、などの目標や方法も提示していくことが求められる。

(2) 「カリキュラムの内容」

本項目に関するインタビューは、「誘導尋問」の域を出なかったが、全体的な傾向は、

①理論的な科目と、実学的な科目がバランスよく並んだカリキュラム

②他学科・コースの科目も履修できるカリキュラム

の2点に集約できる。ただし、この傾向は、4大志望者の考え方と見るべきだろう。特に①は、短大では、「実学的な教養を身につけることのできるカリキュラム」と読み替える必要があると考える。

3. 希望専攻分野——「経営・商学」と「情報」——

(1) 「経営・商学」

最も希望の多いこの分野は、「将来経営者になりたいから」「商売をしたいから」という単純なイメージで選ばれた可能性がある。しかし、具体的に、「旅行・観光ビジネス」「ビジネス・マネージメント」「市場調査」「国際貿易」などをあげている学生も多い。これは、前項に通じるもので、この分野における「実学」を期待しているものと考えられる。文系の学科にはこの分野は必須と考えられるが、特に短大や4年制の教養課程では、ゲーム的な要素を加えると共に、ロール・プレイ、プレゼンテーション、デモンストレーションなどを利用した教授法によって、わかりやすく授業を展開することが求められる。

(2) 「情報」

「自分の勉強や日常生活に、コンピュータはツールとして必要である」という認識が、この分野の人気を高くしていることが立証された。ワードやエクセルの利用、インターネットやEメールの活用、ホームページの作成、パワーポイントによる自己表現、などとともに、グラフィック・デザインなどの分野も取り入れることができると、さらに幅が広がる。

4. 希望する授業内容

「日本社会の仕組みや人間関係」に関する科目に人気が高い理由を尋ねた質問で、日本人との付き合い方に戸惑っている姿が浮かんできた。これは日本に来てまだ日が浅いため、異文化コミュニケーションの分野である。そして、個々に事例が異なるであろうから、授業というよりカウンセリング形式のほうが有効かもしれない。同様に、「体験的な日本文化」の授業も、まだ意識が熟していないようである。日本人や日本文化と接する機会を多く持てるような行事やフィールドワークが必要だろう。一方、「株式市場の動向」に関する科目については、その重要性を説く学生が多いので、今後設置の可能性を探るべきだ。

5. 英語学習の目的

「日常会話の習熟」が、なぜ英語学習の目的の中で圧倒的に支持されているのか。中学・高校で英語を学習した経験を持つ就学生の大多数は、日本の状況と同じで、「話す英語」の訓練を受けた者が少ない。さらに、英語の学習経験者は、簡単には話せるようにはならないことを知って

いる。従って、せめて日常会話くらいはできるようになりたい、と考えてこの項目を選んだ者が多いことが今回の調査で判明した。一方、香港や上海の出身者、将来英語圏への留学を考えている学生は、「ビジネス英語」や「新聞・雑誌などの読解力」をつけたいと望んでいる。また、翻訳や通訳の英語は、願望の域を出ないようであるが、その基本的なスキル科目ぐらいは必要かもしれない。カリキュラムの柱としては、オーラル・コミュニケーション主体のスキル科目と、「ビジネス英語」や「ニュース英語」など、学習内容が特化された科目の両方を用意しておくことが必要だろう。

参考文献

- 金谷 憲 (2002) 「自己表現活動のハードルとその乗り越え方」(『英語教育』2002年10月号, 大修館書店)
- 久村 研 (2002) 「多文化教育環境におけるカリキュラムの研究—日本語学校主学生に対する進路希望調査を中心として—」(『紀要 第34号』平成14年3月20日, 調布学園短期大学)